

出羽地方の丸底長胴甕をめぐる

利 部 修

1 はじめに

近年の煮炊具の研究には目を見張るものがある。1996年9月に開催された第4回東海考古学フォーラムでは、東海地方に限定した縄文時代から中・近世にいたる煮炊具がテーマで、さまざまな問題点が検討された^(註1)。また、時を経ないで催された古代煮炊具のシンポジウムは、畿内を中心に東北から九州に及ぶ広範囲な資料の集成と討論が加えられたことで、従来の集大成とも言うべき内容であった。^(註2)これらの検討会の中で、丸底長胴甕についての情報もかなり明らかになってきたのである。

さらに同年6月、これらに先立って実施された北陸古代土器研究会によるシンポジウムでは、北陸諸国に近江・信濃・出羽の3国を加えた形で長胴甕(平底と丸底)についても話し合われ、いわゆる北陸型長胴甕の消長に関する一定の認識が示された。筆者もこの会に出席する機会を与えられ、出羽北半の9世紀の土器様相について述べると共に、同地域の丸底長胴甕の集成も行った。^(註3)今回の報告は、このことが契機になっている。筆者は現在、律令体制下における辺境域の土器の在り方に関心を寄せており、本論では出羽地方の丸底長胴甕について、技法を中心に据えた現状の整理と分布域の把握を主な目的とする。

2 丸底甕製作技法の研究史

ここでは、縄文時代の丸底をした深鉢を除く丸底甕を取り挙げるが、丸底にするための製作に関する研究を大まかに辿ることから始めたい。^(註4)

丸底甕の製作法についての早い記述は、1966年の横山浩一氏によるものであろう。氏は田中琢氏の教示によるとした上で、「球形の体部をもつ布留式の甕の内部内面には、やはり外型を使ったために生じたい指のあとが見られるから、一部を型によって成形する技法は、球形の器体が盛行した布留式の頃にまでさかのぼりうる可能性がある。」とした。それは、奈良時代の丸底土師器壺が外型によって成形された例の、確認したことを受けたものであった。^(註5)

翌1967年田中琢氏は、「球面状にくぼんだものを型として、そのなかで底部をつくり、その上へさらに左まわりにまきあげて器形をつくる手法」を〈型の手法〉と呼び、型の製作法を具体的に述べた。^(註6)そして、型に粘土を押さえる時の状態から「無秩序な指頭の圧痕が、土器底部内面にある例は、古墳時代以来の壺甕類に普通にあって、」と論じ、これらの底部内面に指頭圧痕が見られるものも〈型の手法〉によるものとした。

1979年西弘海氏は、弥生時代後期(第Ⅴ様式)に続く庄内式やこの後の布留式土器を取り挙げ、発生期の西日本における土師器を論じている。^(註7)そこでの庄内式に対する布留式の評価は、弥生時代後期以来の叩き目技法がなくなり、同時に壺・甕のほとんどが丸底になるという点であった。

そして、布留式土器の丸底製作法に関する2つの技法の違いを提示した。1つは〈削り丸底〉であり、「小形の壺や鉢では、製作工程の最後に、平底に作られた底部を篋削りして丸底にする方法が一般的に行われた」

とした。いま1つは〈押出し丸底〉である。これは、「大形の壺や甕の場合には、底部を内面から押し出して丸底にする」というものであった。そして、「弥生時代後期の叩き目技法の採用、庄内式における内面篋削り技法の採用と丸底への接近、そして布留式における押出し技法による完全な丸底化と叩き目技法の放棄」と技法の変遷を跡づけ、先の〈型の手法〉に対して案に反対の立場をとった。

翌1980年には、これまで主に布留式前後の軟質な丸底甕を対象にすることが多かったのに対して、硬質に焼き締められた須恵器が題材になった。横山氏によって、主題とこれに導かれた内容が技法に終始している本格的な技術論が展開された。^(註8)氏も強調しているように、そこには丸底製作に関する2つの論点がある。

1つは、「壺や中型・小型の甕では、側面叩き目が底面叩き目によっておしつぶされており、側面の叩き締めが底面の叩き締めに先行している」とする考えである。すなわち、轆轤盤上で平底に成形された器を、轆轤からはずして丸底になる叩き締めを行うとする論である。そして側面の表面調整を、丸底成形と平底成形の中間工程として位置づけている。

2つ目は、胴の高さがおよそ45cm以上の大型甕の製作法についてである。観察の可能な資料が少ないとしながらも、「これらの大甕では、底面の叩き目が側面の叩き目に先行してつけられていること、すなわち、中・小の甕とは逆に底面の叩き締めを終わってから側面の叩き締めをおこなっていることが認められた。」と述べた。

以上の見解は、後に問題にされる轆轤使用の丸底長胴甕の製作法の理解に、多大な影響力をもたらしたと同時に、轆轤未使用の甕が平底から丸底にすることの西説を側面より支えることにもなった。

1983年、井上和人氏は布留式土器を再検討する中で、西氏の見解を否定し田中氏の〈型の手法〉の正当性を主張した。氏は布留式の型の製作工程図を示しているが、型作りの認定は内面の指押さえの痕跡、それらの範囲、器壁の薄さ、半球形になる形態などの観察に基づく総合的な判断によるものである。^(註9)そして、型作りの製作法を〈外型作り成形技法〉とし、平底の製作法を〈平底作り成形技法〉と呼んでこれと対比した。

さらに、「7・8世紀の土師器の壺、甕、鍋のほとんどは下半部あるいは底面が外型作り成形技法により製作されている。」とし、古墳時代から奈良時代の丸底甕についての見解を示した他、中・近世の丸底の土製羽釜などについても同様の見通しを述べた。

1986年、西氏の「土師器・須恵器の製作技法」と題する講演録(1984)が公にされた。^(註10)ここでは、“丸底の須恵器”と“丸底の土師器”について項目立てを行って述べている。

前者では前掲横山説(1980)を是認して、自説で扱った布留式土器と同じように平底から丸底に変形する須恵器の丸底化を、〈叩き出し技法〉と呼称した。また、底部の内面に凹凸のある甕の丸底手法を〈突き出し技法〉とする見解を示した。

後者では、前掲井上論文(1983)の底部型作り製作法を取り挙げている。そこでは、乾燥後型からはづした状態が刷毛目調整できない位に硬いこと、さらに「では、なぜそんなつるんとしている物を、なぜ刷毛目でなおさら滑らかにしなきゃならないか」という疑問を掲げて、別の2つの技法より、型作りでなくてはならない必然性はないと反論した。

技法の1つは、須恵器に見られる〈叩き出し技法〉であり、2つには橋本久和氏の刷毛目調整法に則ったもので、内面に刷毛目を掛けることで平底が丸底に変化するとした。^(註11)さらに加えて、布留式並行期の福岡市西新町遺跡の甕を例に、底部外面を削ることで丸底になることにも言及した。氏の論は、丸底製作法に関する従来の諸説を総括したものであった。

以上は、1960年代後半から1980年代前半にわたる約20年間に繰り広げられた議論である。これ以降の論稿

は、丸底製作法の根本的なところではこれらの論文に追随するものであろう。

1989年坂井秀弥氏は、新潟県山三賀Ⅱ遺跡から出土したいわゆるロクロ使用の北陸型長甕の観察より、その製作技法を復元した。^(註12)そこでは、①粘土板と粘土ひもの巻き上げ（一次成形）→②タタキによる成形→③上半部の二次成形・調整→④タタキによる丸底化→⑤体部の最終調整、と製作工程の復原図を掲載して述べた。氏は、土器の製作技法については西氏の論に依拠しているとしながらも、山三賀Ⅱ遺跡の新古の丸底長甕について調整法の相違を詳細に記述した。そこでは、非ロクロ平底長甕やロクロ平底長甕の技法と対比したり、須恵器工人との関連性を強調するなど、製作法観察の新たな展開を模索している。

1994年三好美穂氏は、非ロクロで小甕の大和・山城型甕の製作技法を復元した。^(註13)図を掲載して、①粘土の巻き上げ→②ハケ目の器面調整→③叩き成形の丸底化と口縁の作出→④ハケ目やナデによる最終調整、と製作手順を示した。製作工程上の丸底化の在り方は、細部の手法の相違を除けば坂井氏の論考と基本的には一致している。氏はさらに、③の段階では「内面の当て具は、同心円の刻みがつくものが稀に見られるが、大半は丸い石のようなものか手の甲または指を何本か内面にあて、あて具の代わりにしているものが多い。」と指摘した。

1996年、平尾政幸氏は古代煮炊具のシンポジウムにおいて、7～9世紀では「近畿地域の甕が基本的には丸底である」とし、丸底が「ほとんど例外なく製作工程の後半段階で形成されている」とする認識を示した。^(註14)そして畿内の甕のうち、甕AA（都城で一般的に出土する小甕）、甕AH（南河内系の小甕）、甕CI（口縁が外湾気味の長胴甕）について概念図を用いた製作技法を検討した。

これによれば、甕AAは「粗形を作り上げたのち～特に底部の成形はタタキや押し出し技法を採用しているものが多い。」とし、甕CIでは基本的には甕AAと同様だが「底部の成形にはタタキ技法を用いたものはこれまで確認しておらず、押し出した後、ハケメやケズリで調整しているようである。」とした。

甕AHに関しては新たな解釈を示している。すなわち、底部付近に凹線状の圧痕が認められる例をリング状の器物の痕跡と見て、この状態が型作りと表現されることが多かったのに対して、底部を丸くコテ成形した後、仮置きのかとした杯や碗の痕跡と理解した。そして、「丸底を持つ古代の畿内の土師器甕には、明確に型作りであると確認できた例はない。」と述べた。

また、同シンポジウムの小森俊寛氏の記述でも、「近畿地方北部から東部の丸底のハケメ甕では、7世紀代によく見られる長胴の甕類を含めて、型つくりや粘土をヘラケズリして底部を丸く作り出す技法で製作されたものは確認できていない。」とし、丸底の成形はタタキあるいは押し出しによるものであると強調した。^(註15)

以上、1980年代後半以降に取り挙げた坂井・三好・平尾の3氏による論稿は、本論に関わる7世紀以降のロクロ・非ロクロ丸底土師器における丸底製作法の到達点を示すものである。

3 土師器丸底長胴甕について

出羽地方から出土している丸底長胴甕は、殆どがロクロを使用した土師器である。僅かに須恵質のものも須恵器窯場より出土しているが、それについては坂井氏の「越後の須恵器窯の調査例では土師器煮炊具が出土することが一般的である。」という指摘もあり、本来土師質を目指したところの失敗品と考えられる。このような点やロクロを使用し丸底に叩き出す技法は、須恵器工人と関連するだろうことは先に指摘されている通りである。ロクロ使用の丸底長胴甕が、須恵器と関係することの理解を深める意味で、はじめに辺境域の丸底須恵器について若干触れておきたい。

(1) 丸底須恵器「横山説」の追認

第1図の1と2は、秋田県横手盆地の中央東側に位置している中山丘陵窯跡群の竹原窯跡(1、文献1)と富ヶ沢B窯跡(2、文献2)から出土している資料である。この地域は、『続日本紀』に創建の記事が見える雄勝城の擬定地にも比較的近く、近年9世紀初頭に造営された第2次雄勝城と考えられている払田柵跡からは南へ約20kmの距離にある。

1は、竹原窯跡のS J 05窯跡から出土した8世紀後葉と考えている球胴の甕で、口径が28cm、器高が49.5cmである。製作法は、外面の肩部から底部にかけて平行線のタタキメを施し、底面とこれ以外の体部では各々に連続して施されたまとまりがある。2つの平行線のまとまりは、相互に平行線の傾きが大きく異なり、前者が後者を切り込んでいることが確認できる。内面は、底部には平行線のタタキメがこれ以外の体部では同心円状のアテメが施され、やはり前者が後者を切り込んでいる。

2は、富ヶ沢B窯跡から出土した9世紀中葉と考えている球胴の甕で、口径が21.5cm、器高が44.6cmである。製作法は、外面肩部より底部にかけておおよそ縦位のタタキメを施すが、底部とこれ以外の体部では各々に連続したまとまりを持ち、それらにも若干の方向性の違いが認められる。この場合も前者が後者を切り込んでいる。内面でも、底面に平行線のタタキメをこれ以外の体部では同心状のアテメが施され、やは前者が後者を切り込んでいる。

以上のように、1と2の肩部から底部における製作に関わる痕跡は、ともに底部の痕跡がその製作工程の後半を占めるもので、横山説を支持する内容になっている。しかも2つの資料には、底面より少し高い位置に膨らみがある。富ヶ沢B窯跡の他の例では、平底から丸底化の過程で生じた皺状の痕跡を確かめることができ、これら底部付近の膨らみもその際にできたとする氏の考えを補強するものである。なお、1と2の比較では、底部内面の平行線の在り方が縦位と横位で大きく異なっていた。これが、平行線の刻みを持つ当て具の用い方によるものか、あるいは当て具に対する平行線の刻み方の相違によるかは、今後検討を要する。

一方、丸底須恵器であっても、いわゆる砲弾形で中型の形態とは異なる類例がある。

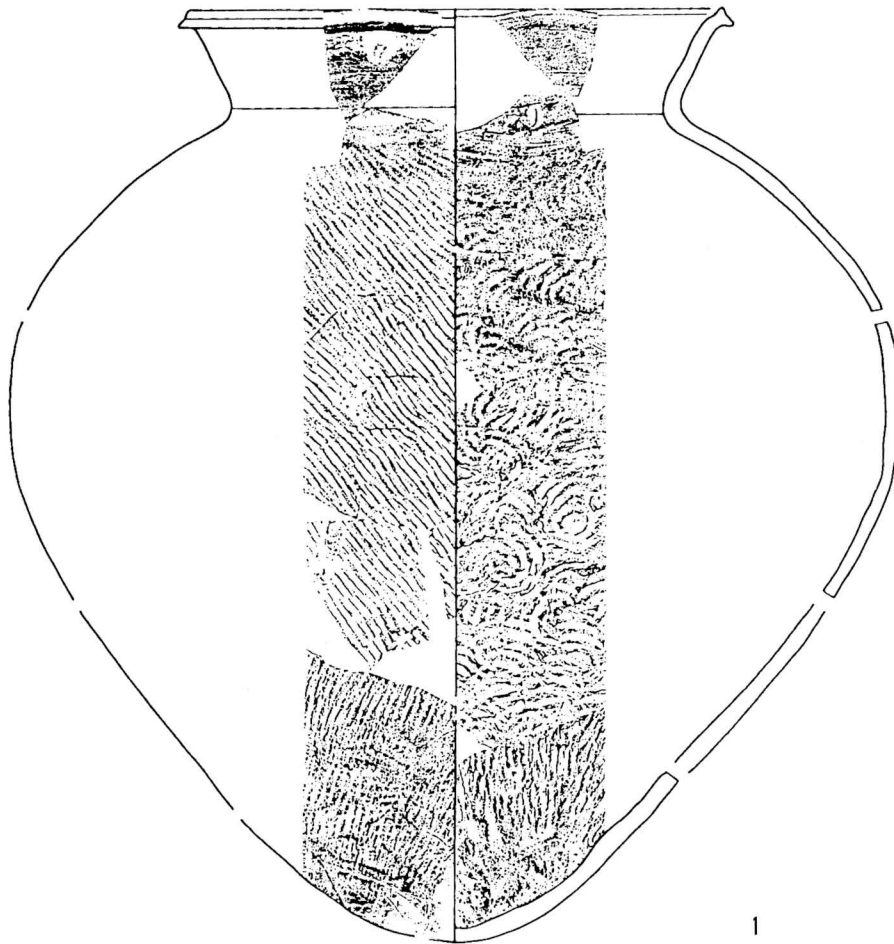
第2図の1は、山形県庄内平野の北端にある宮ノ下遺跡(文献3)から出土した9世紀代の資料で、報告では壺としてあるが甕と見てもよい器形である。底面は平底風の丸底で、口径10.8cm、器高約26cmである。製作法は、底部外面には平行のタタキメが内面には同心円状のアテメを施し、平底にしてから僅かな丸底に仕上げたものである。

2は、前述の竹原窯跡から出土した8世紀後半に考えている甕で、口径12.8cm、器高25.7cmである。製作法は、底部外面では平行タタキの後ハケメを施し、内面にはハケメが施されている。カキメを施した体部とこの下になる底部の境目には段差があり、平底から丸底に押し出して底部にハケメを施したと考えられる。

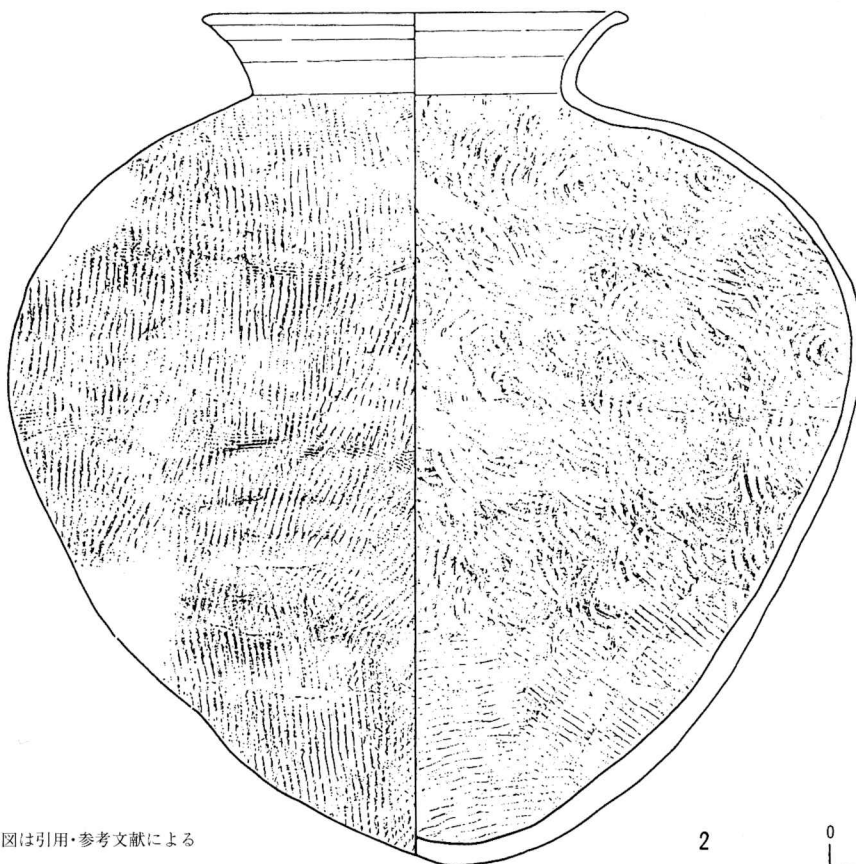
3は、石川県小松市の南加賀古窯跡群(文献4)から出土した9世紀に入る資料で、肩部から底部の形態が2と類似する参考例である。製作法は、底部では外面に平行のタタキメが内面には同心円状のアテメを施し、外面中央にヘラケズリを施している。この場合は、平底から丸底に叩き出している。

これら3つの例は、類例が極めて少ないものの法量が類似しており、丸底長胴甕の形態をとる小型の甕として成立した器種と考えられる。したがって、中型の丸底長胴甕で須恵質のものとは区別している。

以上の5例は、辺境における須恵器丸底甕に関係して述べたものである。事例の中には叩き出しによらないものも一部含んでいるようであるが、須恵器の叩き出しによる丸底製作法が、列島内において普遍的に存在するだろうことを改めて認識することができた。



1



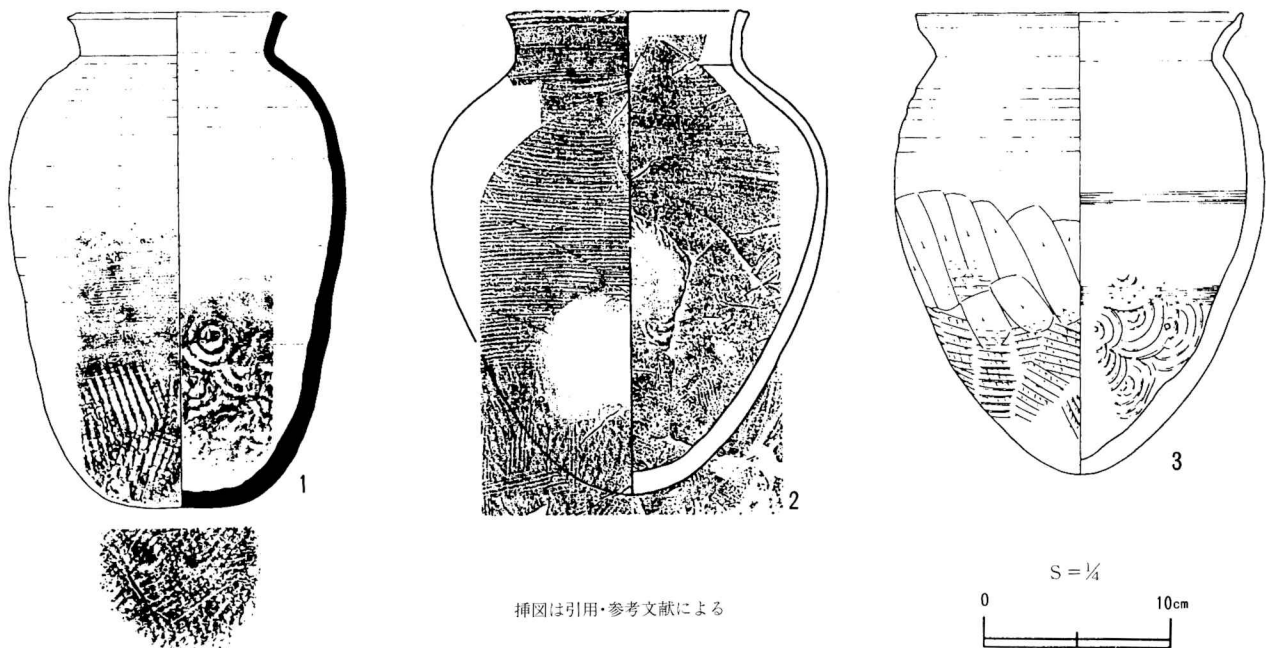
2

挿図は引用・参考文献による

S = 1/4

0 10cm

第1図 中型の須恵器丸底長胴甕



第2図 小型の須恵器丸底長胴甕

(2) 丸底長胴甕の分類と推移

ここでは、出羽地方から出土している中型の土師器丸底長胴甕を対象にする。

時代は出羽建国の和銅5（712）年より律令国家崩壊期までで、その地域は現在の行政区画でいえば山形と秋田の両県域がほぼ該当している。表には、管見に及ぶ^{（註19）}39遺跡の資料77点について掲載してある。これらは、小破片であっても鍋以外の丸底のものは取り上げ、逆に丸底の長胴甕と想定されても不確定要素が多いと判断したものは省いてある。資料収集にあたっては、表に掲載していない資料が意外に多いという印象をもっているが、ここでは確実な資料に限ったつもりである。

① 調整手法による分類

分類にあたっては、形態の相違による基準は採用せずに、技法を基にした展開を図りたい。製法は、根本的な製作に関わる成形技法と表面を整える調整手法に、大きくは2分できる。また丸底の成形では、外面のタタキメと内面のアテメで判断される叩き出し技法と、内外面の調整手法で隠されているが押し出しと考えられている技法とが一般的である。そして、タタキメやアテメは個別単位では調整手法といえ、連続的に施され集積された効果が成形技法として現れている訳である。したがって、以下では上記2つの技法を丸底成形技法の基準に考え、その分類項目は特に設けず底部及び体部下半で主体となる調整手法を基本に据えた検討を行う。さらに、畿内や北陸地方において大きな特色を示しているロクロ使用の有無は、当地方においても不可欠な分類要素である（第3・4図参照）。

A類…非ロクロ製で、外面にハケメを内面にはハケメを施す（1、文献17）。

頸部はくの字状で、口縁部は緩く外反する。底部は半球状を呈し、胴部中央で最大径を示す。

B類…ロクロ製で、外面にタタキメを内面にはアテメを施す（2～16、文献34・37・21・14・16・45・44・46）。

調整は外面にケズリが施され、内面にはハケメを持つものと、それらの無いものがある。2と3は人面墨画土器である。3の頸部は緩く水平に外反し、端部を短く摘み出す。3を除いた頸部はくの字状で、口唇部は逆くの字状に摘み出したもの（2・5・8～10）と、頸部から内湾して立ち上が

るもの(11~16)に大きく分けられる。底部の形態は、半球状の4を除いてやや尖り気味である。最大径は、胴部中央かその下位にあるものが目立つ(5・8~16)。

C類…ロクロ製で、外面にヘラケズリを内面にはハケメを施す(17~21、文献15・14・9)。

調整は、外面にハケメを持つものと、その無いものがある。頸部は断面がくの字状で、口唇部は斜めに面を成したり窪み状のものが多い(17~19・21)。底部の形態はやや尖り気味である。最大径は、胴部中央かその上位にある。

D類…ロクロ製で、外面にタタキメを内面にはナデを施す(23、文献19)。

外面にはケズリを認め、内面には指頭圧痕が顕著である。頸部は緩やかで、そのまま口唇部に至ると考えられる。底部は幅の狭い半球状を成す。最大径は胴中央の上位にある。

E類…ロクロ製で、外面にケズリを内面にはアテメを施す(22)。

頸部はくの字状で、口縁部はそのまま直線的に外傾し、口唇部は緩く窪む。底部はやや丸みを持ち、最大径は胴部上位にある。

以上の他に、分類に加えていない24~26の類例がある。

24は、報告書によればロクロ製で外面がヘラケズリ、内面がハケメであることから、C類に該当しそうな例である。これは、底部外面の上端が体部と連続せず段を作ることから、前述の平尾氏が示した仮置き台の痕跡か、もしくは器物の型作りの可能性もあろう。したがって、今のところC類からは外して考えておきたい。

25は、外面にヘラケズリを内面には底部の指頭圧痕と共にナデを施しているが、ロクロの有無が確認できない例である。^(註20)仮にロクロ製とするならば、新たに分類し得る内容である。しかし、微妙であるが底部の外面が曲面なのに対して、内面は全体に平坦な状態を呈している。このことより寧ろ、奈良・平安時代の丸底技法である叩き出し・押し出し技法と並んだ削り出し技法(1979年、西氏が〈削り丸底〉と呼んだ状態と同じである。)と見るべきであり、当時代と地域において希有な事例として評価しておきたい。

26は、外面にタタキとその一部にハケメを内面にはハケメを施している。これも、調整法だけからは新たな分類と成し得る。しかし、底部の中央には安定した盛り上がりがあり、平底の外面端部に丸みを施したと考えられるものである。25の削り出し技法と異なるが、平底の角を変化させる類似性がある。丸底製作法に関して、今後25と共に注目される資料の1つである。

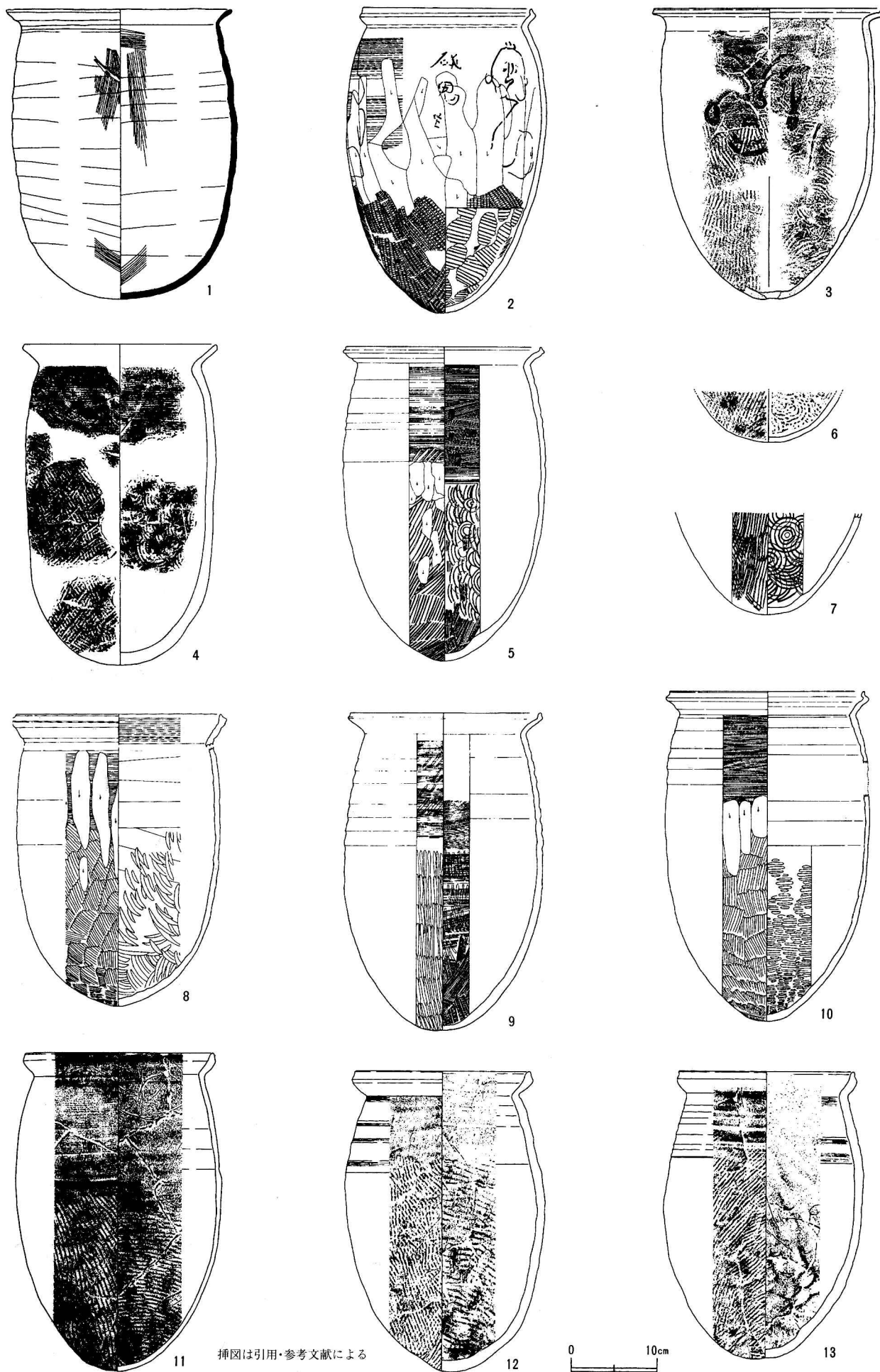
図示していないがこの外に、ロクロ製で外面中央にタタキメがあり、内面に指頭圧痕が顕著な秋田城跡出土の例がある。また、片野遺跡の20・21と共伴したものは、底部外面の先端がナデで仕上がっている以外はC類の特徴を持っている。これは、丸底製作法の押し出し技法を如実に示す好例であり、押し出し段階に器肉が整いヘラケズリが省略できたものである。したがって、B類の範疇に捉えてある。

② 分類の推移

第3・4図の資料には、年代の推定できていないものもあるが、できる限り検討してみることにする。以下、共伴遺物などを基にした年代観より、分類における大まかな推移を辿ることにしたい。

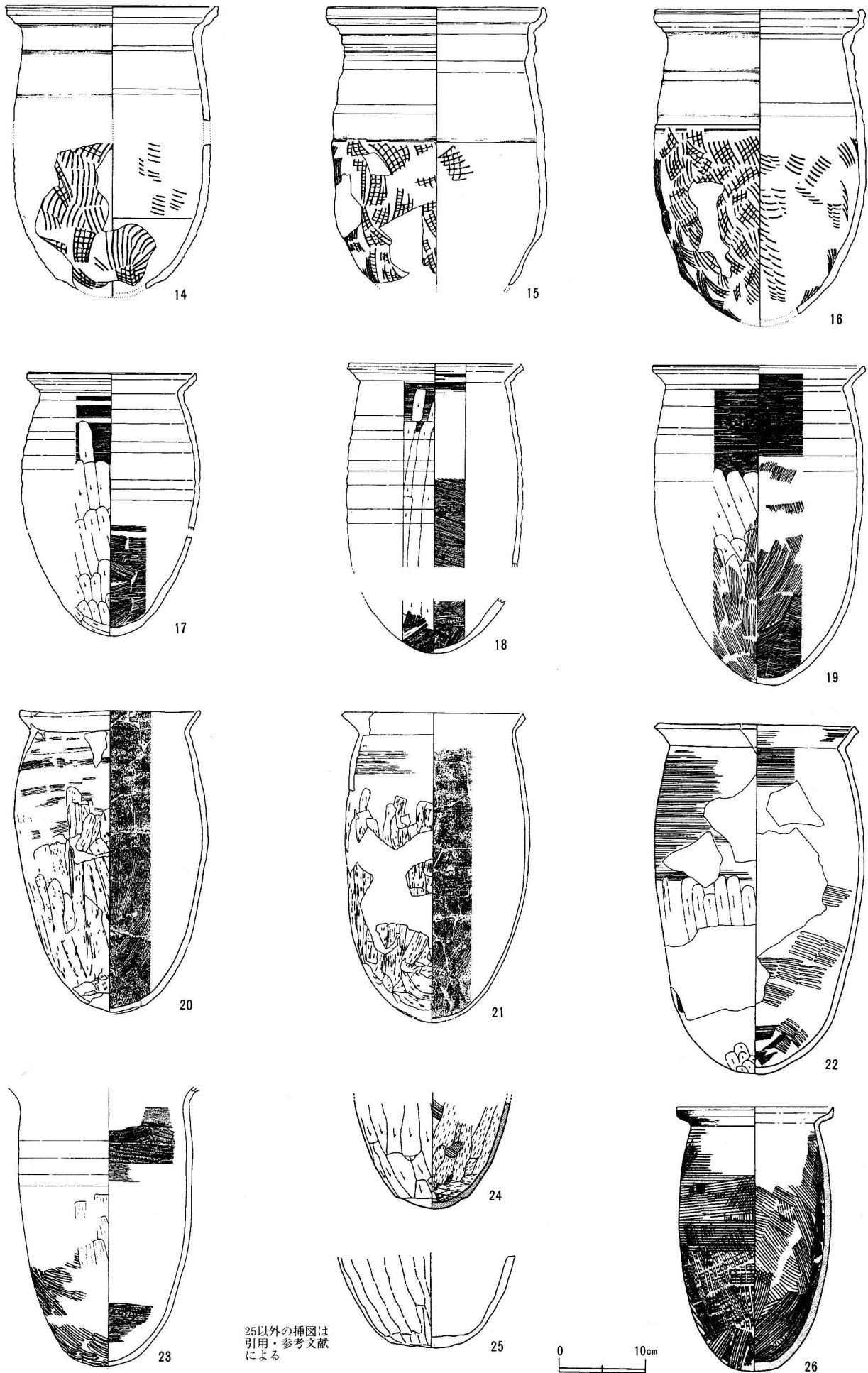
A類の1は、後城遺跡のS I 187住居跡から出土している。小型の須恵器坏が伴うようで、他に非ロクロの長胴甕や小型の鉢が出土している。ロクロ製の土師器が含まれないことや須恵器坏より、奈良時代の所産と考えてよい。遺跡からは、8世紀前葉に考えられるかえりの持つ須恵器蓋が出土しており、隣接する秋田城跡よりも古い遺物が出土している。

B類の4は、年子狐遺跡の第2号住居跡から出土している。須恵器の坏・高台付坏・蓋や土師器の坏・高



挿図は引用・参考文献による

第3図 土師器丸底長胴甕(1)



第4図 土師器丸底長胴甕(2)

坏・甕・鉢が出土している。共伴関係は判然としないが、須恵器の年代観などから概ね8世紀後半に考えられる。

B類の5とC類の18は、秋田城跡のS I 1085住居跡から出土している。これらは、比較的多くの須恵器坏や蓋と共に埋土中より見つかったが、須恵器などの特徴から概ね9世紀前半に推定される。

B類の2は人面墨画土器で、S G 7 河川から多量の斎串や須恵器坏・高台付坏・蓋などと共に出土している。調査者は土器の年代観より、9世紀第2～第3四半期頃を考えている。

B類の3は人面墨画土器で、俵田遺跡のS M60祭祀遺構から出土している。この甕には斎串約30本と刀形と人形の股部が納まっており、近くから出土した小型の須恵器甕にも人形と9本の斎串が入っていた。さらに、周辺より人形・斎串・刀形・馬形などが出土しており、調査者は須恵器甕を9世紀中葉頃としている。この年代は、嘉祥3(850)年全国に先駆けて出羽国に陰陽師を置くことが許されている、『文徳実録』の記事と符号する結果になっている。^(註21)

B類の11～13は、山海窯跡群中のS Q 9 須恵器窯跡出土資料(11)とE U 1 合口甕棺(12・13)のものである。11は、比較的多くの坏や高台付坏を共伴しており、9世紀後半の年代を想定している。12・13も11と類似した形態を呈しており、同様に考えられる。

B類の8は、秋田城跡のS I 1157住居跡から出土している。これには、須恵器坏や碗形の土師器坏を伴っており、碗形の坏より9世紀前葉が考えられる。

B類9は、秋田城跡のS I 1050住居跡覆土から出土している。これに伴わない須恵器坏や、覆土中の碗形土師器坏などから、9世紀前半が想定される。

B類の10は、秋田城跡のS I 1061住居跡覆土から出土している。遺物は少ないが、共伴する須恵器坏1点と覆土の碗形土師器坏などから、概ね9世紀前半が想定される。

B類の14～16は、千河原遺跡のS K 61土坑(14)と包含層(15・16)から出土している。これらは、調査者によって11世紀前半に想定しているが、10世紀代に考えておきたい。

C類の20・21は、片野I遺跡の第1号住居跡から出土している。須恵器坏・高台付坏・蓋や土師器の小甕などがみつかった。共伴している坏には、底径が大きく回転糸切りのものがあり、8世紀後葉の年代を考えている。

C類の17と19は、秋田城跡のS I 1110住居跡から出土している。これらは、比較的多くの須恵器坏・高台付坏・蓋や土師器坏・高台付坏・甕と共に埋土中より見つかったが、出土遺物より概ね8世紀後葉～9世紀前葉と考えられる。

D類の23は、下田遺跡のS I 69住居跡から出土している。ここからは、土師器の皿・坏・平底甕などがみつかり、須恵器は出土していない。調査者は、10世紀前半に考えられている灰白色の火山灰も考慮して、10世紀前半頃までの年代を想定している。

E類の22は、桜林興野遺跡の遺構外から出土している。調査者は、奈良時代後葉～平安時代初頭(8世紀末葉～9世紀初頭)の年代を想定している。

上述のように、個別の資料について報告書の成果を基にして列挙してきたが、各分類ごとの推移について簡単にまとめておく。

A類は唯一の資料で、奈良時代に想定しているものである。ロクロ製の類例が、圧倒的に多くなる9世紀代には認められない。B類で最も古いのが、8世紀後半の4の資料である。以降、9世紀前半の5・8～10→9世紀後半の11～13→10世紀の14～16と推移して行く。C類で最も古いのは、8世紀後葉の20・21の資料

である。次に、8世紀後葉から9世紀前葉の17・19と推移し、これ以降の良好な資料は確認できていない。D類は10世紀前半の資料である。これより古い資料は確認されず、B類の末期的な在り方を示すものかもしれない。E類も唯一の資料で、8世紀末葉から9世紀初頭に想定されているものである。技法的には、B・C類の双方に関連している。

以上より、8・9世紀における丸底長胴甕B類の卓越した状況を知ることができる^(註22)（表参照）。

（3）丸底長胴甕の分布と評価

第5図には、須恵器（表の12・19）や須恵質（表の11・12・14?・40）の長胴甕を含んだ土師器長胴甕の分布を示してある。須恵器や須恵質を除いた土師器長胴甕は、出羽のほぼ全域より出土しているが、海岸部と内陸部に分けてみると前者の分布が濃い。分布のまとまりは、米代川河口の能代平野、雄物川河口の秋田平野、同中流域の横手盆地、最上川河口の庄内平野、同中流域の山形盆地にある。特に、秋田城跡のある秋田平野と城輪柵跡のある庄内平野に顕著な集中が認められ、払田柵跡の近くからも出土例が多いことを考慮すれば、城柵官衙遺跡との関わり合いが強い。

先に検討した分類項目の在り方はどうであろうか。分類はA～Eまで行っているが、内容や記載が不明なために分類から外したものもある。

A類は、後城遺跡だけからの出土である。

B類は、出土量が最も多くかつ最も広範な分布の広がりを持つ。三十刈Ⅱ遺跡が、この類の出羽地方における今のところの北端資料に当たっている。丸底長胴甕が最も集中している庄内平野では、出土資料の殆どがB類で占められ、秋田平野の分布でも半数以上を占めている。さらに、内陸部の横手盆地に認められている。

C類は、出羽南半において北目長田遺跡より、北半では秋田城跡と近くの片野Ⅰ遺跡から出土している。前者を除けば、秋田平野に集中した在り方を示している。

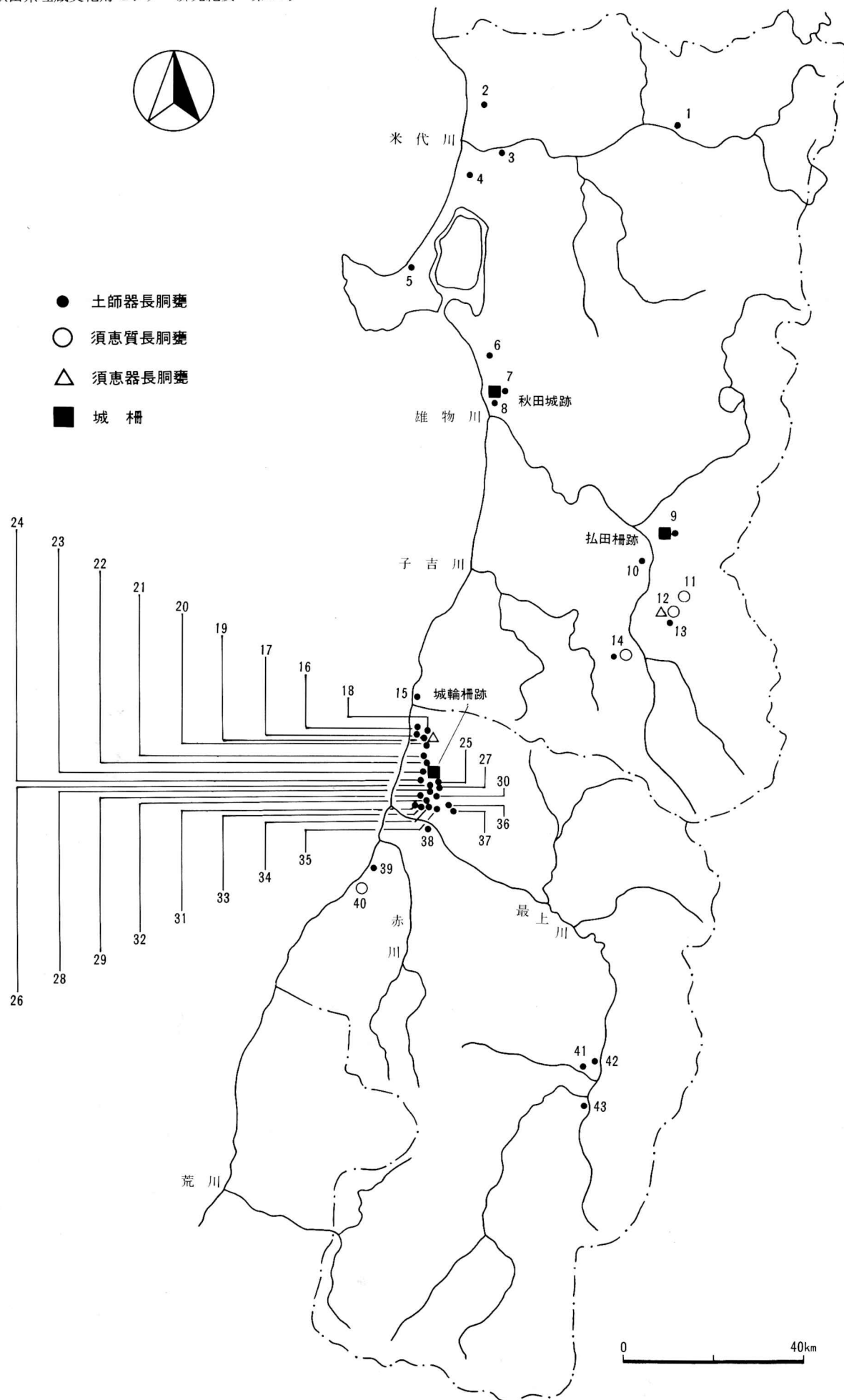
D類は、寒川Ⅱ遺跡と下田遺跡から出土している。下田遺跡の個体数が目立つが、今のところ出羽北半の類例として捉えられそうである。

E類は、桜林興野遺跡だけからの出土であり、出羽北半には認められないようである。

以上の分布の様子から、B類を除いた各類では数量が極めて少ないことが分かった。特に、A・E類は1遺跡ずつで、C・D類についても2～3遺跡ずつである。このうち、北陸地方にも認められるC類を除けば、D・E類は在地性が強く、E類にいたっては新しいこともあり手抜き技法とも考えられる。

A類はどうであろう。この例は古手に属し、作りや胎土・焼成がしっかりしている。調整のカキメは、刻みの幅が広くかつ深い。この胎土には、出羽北半の資料には認められない1～2mmの金ウンモが疎らに見られ、さらに粒が大きい長石も含む。新潟県の阿賀北地方には、金ウンモを含んだ須恵器を生産している窯跡^(註23)があり、当地方よりもたらされた搬入品の可能性が指摘される。

次にB類について述べる。B類は、いわゆる北陸型長胴甕と呼ばれているものである。この器種は、早く吉岡康暢氏により注目され、北陸地方を中心にした分布域が坂井氏によって指摘されている。名称の規定は、橋本正氏の提唱に従った岸本雅敏氏によって述べられ、須恵器の製作技法による土師器甕としたのである。^(註24)^(註25)^(註26)しかし、技法などに「汎北陸型」と言えるような明確な範型が見いだしにくいとした北野博司氏は、北陸系長胴甕^(註27)の名称を用いている。B～E類が、いわゆる北陸型長胴甕の影響下に出羽で製作・波及したことは周知されるが、中でも最も大きな作用を示しているのがB類である。



第5図 丸底長胴甕の出土地

表 丸底長胴甕の出土地一覧

No.	遺 跡 名	所在地(市町村)	遺 構	甕	分類	文献	No.	遺 跡 名	所在地(市町村)	遺 構	甕	分類	文献
1	池内遺跡	秋田県大館市	S I 126	—	—	—	16	升川遺跡	山形県遊佐町	S K 431	—	B ?	24
2	城土手遺跡	秋田県峰浜村	遺構外	—	—	5	17	北目長田遺跡	〃	遺構外	—	C	25
3	大館遺跡	秋田県能代市	遺構外	—	—	6	〃	〃	S K 374	—	B	〃	〃
4	寒川Ⅱ遺跡	秋田県能代市	15号住	○	D	7	18	宅田遺跡	〃	遺構外	—	B ?	26
5	三十刈Ⅱ遺跡	秋田県男鹿市	S I 01	○	B	8	19	宮ノ下遺跡	〃	S G 1200	—	B ?	3
6	片野Ⅰ遺跡	秋田県秋田市	1号住	○	C	9	〃	〃	〃	○	須恵器	〃	〃
〃	〃	〃	〃	○	C	〃	20	大坪遺跡	〃	S G 1	—	B ?	27
〃	〃	〃	〃	○	C	〃	21	東田遺跡	〃	遺構外	○	B	28
〃	〃	〃	遺構外	—	B ?	〃	22	地正面遺跡	山形県酒田市	S X 11	—	B ?	29
〃	〃	〃	〃	—	B ?	〃	23	豊原遺跡	山形県酒田市	S Q 20	—	—	30
7	秋田城跡	秋田県秋田市	S I 217	○	B	10	24	上曽根遺跡	山形県酒田市	遺構外	—	B ?	31
〃	〃	〃	〃	○	B	〃	25	沼田遺跡	山形県八幡町	E B 190	—	B ?	32
〃	〃	〃	S I 704	—	B ?	11	〃	〃	溝状遺構	—	B ?	〃	〃
〃	〃	〃	S K 549	○	B	12	26	境興野遺跡	山形県酒田市	S K 68	—	B ?	33
〃	〃	〃	S I 1004	○	—	13	〃	〃	S K 143	—	B ?	〃	〃
〃	〃	〃	S I 1022	—	—	〃	〃	〃	S K 145	—	B ?	〃	〃
〃	〃	〃	S G 1031	○	C	14	27	俵田遺跡	山形県八幡町	S M 60	○	B	34
〃	〃	〃	S I 1050	○	B	〃	28	北田遺跡	山形県酒田市	S D 131	—	B ?	35
〃	〃	〃	S I 1061	○	B	〃	29	新青渡遺跡	山形県酒田市	S E 260	—	B ?	36
〃	〃	〃	S I 1085	○	C	〃	30	横代遺跡	山形県酒田市	S G 7	○	B	37
〃	〃	〃	〃	○	B	〃	31	熊野田遺跡	山形県酒田市	S K 2	○	—	38
〃	〃	〃	S I 1086	—	C ?	〃	〃	〃	〃	S D 5	—	B ?	〃
〃	〃	〃	〃	—	B ?	〃	32	手蔵田 2 遺跡	山形県酒田市	S K 116	—	B	39
〃	〃	〃	S I 110	○	C	15	33	手蔵田 5 遺跡	〃	S D 540	○	B	40
〃	〃	〃	〃	○	C	〃	34	手蔵田 6・7 遺跡	〃	遺構外	—	B ?	41
〃	〃	〃	S I 1157	○	B	16	35	桜林興野遺跡	山形県平田町	S K 7	○	E	42
8	後城遺跡	秋田県秋田市	S I 187	—	A	17	〃	〃	遺構外	○	B	〃	〃
〃	〃	〃	S I 169	○	B	〃	36	山橋 5 遺跡	〃	S Q 1	○	B	43
9	払田柵跡	秋田県仙北町	S I 27	—	B ?	18	〃	〃	〃	○	B	〃	〃
10	下田遺跡	秋田県大森町	S I 69	—	D	19	37	山海窯跡群	〃	S Q 9	○	B	45
〃	〃	〃	〃	—	D ?	〃	〃	〃	〃	E U 1	○	B	44
〃	〃	〃	〃	○	D ?	〃	〃	〃	〃	〃	○	B	〃
〃	〃	〃	S I 74	○	D	〃	38	千河原遺跡	山形県余目町	S K 31	—	—	46
〃	〃	〃	〃	—	D ?	〃	〃	〃	〃	S K 61	○	B	〃
〃	〃	〃	S K 89	—	D ?	〃	〃	〃	〃	遺構外	○	B	〃
〃	〃	〃	遺構外	—	D ?	〃	〃	〃	〃	〃	○	B	〃
11	物見窯跡	秋田県横手市	窯跡	○	須恵質	20	39	西谷地遺跡	山形県鶴岡市	合口甕棺	○	B	47
12	竹原窯跡	秋田県平鹿町	S K 02	—	須恵質	1	40	荒沢窯跡	山形県鶴岡市	窯跡	—	須恵質	48
〃	〃	〃	S T 19	○	須恵器	〃	41	熊野台遺跡	山形県河北町	27号住	○	—	49
13	年子狐遺跡	〃	2号住	○	B ?	21	42	不動木遺跡	〃	S T 3	—	—	50
14	七窪遺跡	秋田県羽後町	二号捨場	—	須恵質?	22	43	達磨寺遺跡	山形県中山町	S T 90	—	—	51
15	カウヤ遺跡	秋田県象潟町	S I 12	○	B	23							

またB類では、タタキメが平行線、アテメが同心円状（a類）もしくはそのように弧状の曲線を呈するもの（b類）と、平行線（c類）のものがある。アテメがa類の例は年子狐遺跡、秋田城跡、手蔵田6・7（第3図4～7）だけであり、b類のものは僅かで（8・9）、殆どが平行線を平行に用いるc類である。これらの年代を考慮すれば、類例が最も多いc類が9世紀代、a・b類は8世紀後半より9世紀前半にかけて存在している傾向にある。c類は、北陸地方以南では認められないようであり、出羽国に独自の在り方を示すものと考えられる。

最後にC類について触れておきたい。C類は、上野赤坂A遺跡（文献52）など北陸地方でも越中以東に認められている。^{（註28）}この類はロクロを用いているものの、タタキメやアテメを残さないことからすれば、北陸型土師器長甕とはいえない。8世紀後半以降は、在地においてもロクロ使用土器にヘラケズリが多用されてくる時期であり、出羽国のC類が北陸でも東部の影響で成立したか、出羽独自の出自を持つのかは今後の課題である。

以上のように、丸底長胴甕の各分類ごとの特色を述べたが、分類で時期的にも古い方の主体を成しているA～C類については、秋田城跡とその近くの遺跡が強く関連していることが理解される。8世紀の遺跡がごく少ないとする最近の庄内地方の調査成果からしても、和銅5（733）年の出羽柵移転以降の整備に伴う、^{（註29）}北陸地方の人的・物的移入が大きく関わっていたと考えられよう。

4 おわりに

本論では、土師器丸底長胴甕の出羽地方における在り方を探るため、丸底の製作技法や調整手法のバリエーションで複雑化して見える製作法に一定の整理を試みた。そのために丸底土器製作法の研究史に紙面を多く費やしている。さらに、最近の成果を踏まえて検討した結果、叩き出しと押し出し技法を基にした製作手法による、A～E類までの分類を行った。この中で、B類が大勢を占めたことは、須恵器丸底甕の製作法と関連して強調されなければならない点であろう。

出羽におけるA・B類の分布状態からは、土師器丸底長胴甕の系譜の出自を北陸地方に求めることが改めて認識された。さらに、その影響が沿岸部の城柵官衙遺跡を中心に、出羽の北部や内陸部へ拡大していく様相も知ることができた。なおB類アテメの状態については、c類が出羽のメルクマールになる可能性のあることを指摘した。A類の年代と搬入元の吟味は、後城遺跡の性格を知るうえで今後大きな意味を持つ。

C類以下では、出羽独自の特色を持つ手法について、ある程度の見通しが得られたように思われる。敢えて分類から外した少数の例は、製作者の個性によるのか地域色を表すものかは不明であるが、特殊事例が在地産であれば、持ち得る意味がさらに大きくなる。これら在地の特色は、地域間さらには国域間の人的交流を捉える上での、重要な要素になり得ると考えている。^{（註30）}

一方、土師器丸底長胴甕の生産体制はどうであろうか。

この器種が、生産されていたことを示す遺跡には、物見窯跡・竹原窯跡・七窪遺跡（窯跡）・荒沢窯跡がある。これらの窯跡から出土したものは、前述のように土師質を意図したものであり、須恵器窯跡で生産されていたことを示している。土師器焼成遺構から、煮炊具が出土していることは知られる（文献53）が、今のところ丸底長胴甕の報告はない。つまり、土師器丸底長胴甕が須恵器工人と技術的に結び付きが強いのみならず、生産場所においてもそれが認められた訳である。

これらの事例が、すぐさま土師器丸底長胴甕が須恵器窯跡で生産されたことを示す、と考えるのは早計で

あろう。8世紀後半から9世紀前半の、生産体制が整っていたと思われる時期に、数の少ないC類がB類と共に使用されている。この事象によれば、タタキとアテメを多用する須恵器工人が、わざわざ土師器工人の多用するケズリとハケメを取り入れたとは考え難いからである。したがって、B類が須恵器窯跡で専焼されていたことは理解されるが、C類は土師器焼成遺構で生産された可能性^(註31)があろう。

今回の分類と成果は、出羽地方を対象としたものであった。今後は、東北一円の広範囲にわたった資料の検討が望まれるし、そのことで律令期出羽国の様相がより具体化してくるものと思われる。資料の増加と併せて、将来の課題としたい。

最後になりましたが、冬季の収蔵庫における資料実見にあたり、辛抱よく遺物を取り出して下さった伊藤武士氏には、心よりお礼申し上げます。また、さまざまな点でご教示戴いたことも付記しておきたい。

註

- 1 第4回東海考古学フォーラム実行委員会『鍋と甕 そのデザイン』 1996(平成8)年
 - 2 森 郁夫編『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東4 煮炊具―』古代の土器研究会 1996(平成8)年
 - 3 第77回北陸古代土器研究会例会の『北陸の9世紀代の土器様相』と題したテーマで、「秋田県の9世紀以降の様相」とした資料を作成して口頭発表を行った(於: 富山県勤労者いこいの村, 1996.6.)。
 - 4 研究史の技法に関わる用語は、引用文との兼ね合いがあるため各研究者の用い方に準じている。
 - 5 横山浩一「5 土器生産」『日本の考古学 V』古墳時代(下) 河出書房新社 1966(昭和41)年 p.59
 - 6 田中 琢「(4) 畿内」『日本の考古学 VI』歴史時代(上) 河出書房新社 1967(昭和42)年 pp.193~196
 - 7 西 弘海「西日本の土師器」『世界陶磁全集 2』日本古代 小学館 1979(昭和54)年 p.165
 - 8 横山浩一「須恵器の叩き目」『史淵』117号 1980(昭和55)年 p.141・143
 - 9 井上和人「布留式」土器の再検討」『文化財論叢』 1983(昭和58)年
 - 10 西 弘海「平底の土器・丸底の土器」『土器様式の成立とその背景』 真陽社 1986(昭和61)年
 - 11 高槻市教育委員会『昭和53・54・55年度 高槻市文化財年報』 1981(昭和56)年
 - 12 坂井秀弥「北陸型土師器長甕の製作技法」『新潟考古学談話会会報』第3号 1989(平成元年)
 - 13 三好美穂「古代土師器甕の検討―大和・山城型甕の製作技術を中心として―」『文化財論集』 1994(平成6)年
 - 14 平尾政幸「畿内の土師器甕の製作技法」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東4 煮炊具―』 1996(平成8)年
 - 15 小森俊寛「近畿北部の煮炊具―但馬・丹後・丹波・山城・大和・近江・伊賀・伊勢・志摩―」『古代の土器研究―律令的土器様式の西・東4 煮炊具―』 1996(平成8)年
 - 16 註の12に同じ。
 - 17 熊田亮介「蝦狄と北の城柵」『越と古代の北陸』名著出版 1996(平成8)年
 - 18 以下の文中で筆者が用いる調整手法は、カタカナで記載することにした。また、タタキメ・アテメ・ハケメ・カキメは厳密には痕跡状態を示したもので、手法名としては適切な用語ではない。しかし、現在適当な用語を示せないの、しばらくは慣用に従って使用することにした。また、木口の使用痕をハケメ、ロクロ使用のそれをカキメとして記述する。
 - 19 今泉隆雄氏は、越後との関係も示しながら出羽国の範囲を図化している。
- 今泉隆雄「大化の改新と東国」『東アジアにおける古代国家成立期の諸問題』国際古代史シンポジウム実行委員会

1996(平成8)年

- 20 この資料は大館市の池内遺跡より出土した。現在、秋田県埋蔵文化財センターが整理作業を行っているが、担当の
桜田隆氏のご好意で使用させて戴いた。
- 21 山形県教育委員会『俵田遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第77集 1984(昭和59)年
- 22 出羽国のB類(後城遺跡資料)については、1979年段階で10世紀末～11世紀の年代観が、岩崎卓也氏によって示さ
れたことがあった。
- 岩崎卓也「東日本の土師器」『世界陶磁全集 2』日本古代 小学館 1979(昭和54)年
- 23 坂井秀弥「3 奈良・平安時代」『新新バイパス関係発掘調査報告書 山三賀Ⅱ遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告
書第53集 1989(平成元)年
- 24 吉岡康暢「土器の編年の考察」『加賀三浦遺跡の研究』石川県松任町教育委員会 1967(昭和42)年
- 25 註12によれば、佐渡を除く北陸地方のほかに、南は近江湖西地方、北は出羽の日本海沿岸地域の広がりがあるとし
ている。
- 26 岸本雅敏「Ⅷ 東江上遺跡」『北陸自動車道遺跡調査報告書ー上市町土器・石器編ー』上市町教育委員会 1982(昭
和57)年 なお、岩崎氏は前掲註22の中で、タタキメ・アテメを持つ土師器丸底長胴甕が、須恵器技法の借用である
と早くに指摘している。
- 27 北野博司「古代北陸の煮炊具」『古代の土器研究ー律令的土器様式の西・東4 煮炊具ー』 1996(平成8)年
なお氏は、長胴甕を含んだ古代北陸の煮炊具について、Ⅰ～Ⅴ期まで分け各国の様相を述べた。
- 28 註27に同じ。なお、北陸地方の分布域について北野氏よりご教示戴いている。
- 29 小松正夫「八、九世紀における出羽北半須恵器の特質」『考古学研究』第36巻第1号 1989(平成元)年
坂井秀弥「日本海側の古代城柵と北方社会」『考古学ジャーナル』411号 1996(平成8)年
- 30 小田和利氏は、豊前国で土師器丸底長胴甕が出土したことから、北陸地方からの専業工人集団の移住を想定してい
る。
- 小田和利「豊前出土の北陸系土器について」『九州歴史資料館 研究論集』19 1994(平成6)年
- 31 望月精司「望月報告の訂正及び概略と検討会雑感」『窯跡通信』第4号 窯跡研究会 1995(平成7)年

引用・参考文献

- 1 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅺー竹原窯跡ー』秋田県文化財調査報告書第209集
1991(平成2)年
- 2 秋田県教育委員会『秋田ふるさと村(仮称)建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書ー富ヶ沢A・B・C窯跡
田久保下遺跡 富ヶ沢1号～4号塚ー(第一分冊)』秋田県文化財調査報告書第220集 1992(平成4)年
- 3 財団法人 山形県埋蔵文化財センター『宮ノ下遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第32集
1996(平成8)年
- 4 石川県小松市教育委員会『戸津古窯跡群Ⅰ』平成元年度戸津古窯跡群発掘調査報告書 1991(平成3)年
- 5 秋田県教育委員会『城土手遺跡緊急発掘調査報告書 海老沢窯跡緊急発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書
第32集 1975(昭和50)年
- 6 能代市教育委員会『大館遺跡発掘調査報告書』 1978(昭和53)年
- 7 秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰー寒川Ⅰ遺跡・寒川Ⅱ
遺跡ー』秋田県文化財調査報告書第167集 1988(昭和63)年

- 8 秋田県教育委員会『三十刈Ⅰ・Ⅱ遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第110集 1984(昭和59)年
- 9 秋田県教育委員会『秋田外環状道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－片野Ⅰ遺跡－』秋田県文化財調査報告書第265集 1996(平成8)年
- 10 秋田市教育委員会『秋田城跡』昭和50年度秋田城跡発掘調査概報 1976(昭和51)年
- 11 秋田市教育委員会『秋田城跡』昭和58年度秋田城跡発掘調査概報 1984(昭和59)年
- 12 秋田市教育委員会『秋田城跡』昭和60年度秋田城跡発掘調査概報 1986(昭和61)年
- 13 秋田市教育委員会『秋田城跡』平成元年度秋田城跡発掘調査概報 1990(平成2)年
- 14 秋田市教育委員会『秋田城跡』平成二年度秋田城跡発掘調査概報 1991(平成3)年
- 15 秋田市教育委員会『秋田城跡』平成三年度秋田城跡発掘調査概報 1992(平成4)年
- 16 秋田市教育委員会『秋田城跡』平成四年度秋田城跡発掘調査概報 1993(平成5)年
- 17 秋田市教育委員会『後城遺跡発掘調査報告書』昭和53年度 1981(昭和56)年
- 18 秋田県教育委員会『払田柵跡－昭和50年度発掘調査概要－』秋田県文化財調査報告書第40集 1976(昭和51)年
- 19 秋田県教育委員会『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅳ－下田遺跡・下田谷地遺跡－』秋田県文化財報告書第189集 1990(平成2)年
- 20 杉刈馨「物見窯跡について」『秋田地方史論集』みしま書房 1981(昭和56)年
- 21 平鹿町教育委員会『年子狐地区遺跡詳細分布調査報告書』平鹿町文化財調査報告書 1988(昭和63)年
- 22 秋田県教育委員会『足田遺跡発掘調査概報』秋田県文化財調査報告書第10集 1967(昭和42)年
- 23 秋田県教育委員会『カウヤ遺跡第2次発掘調査報告書－一般国道7号小砂川局改計画路線に伴う埋蔵文化財発掘調査－』秋田県文化財調査報告書第135集 1986(昭和61)年
- 24 財団法人 山形県埋蔵文化財センター『升川遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第9集 1994(平成6)年
- 25 山形県埋蔵文化財センター『北目長田遺跡 櫓待遺跡 第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第31集 1996(平成8)年
- 26 山形県教育委員会『宅田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第72集 1983(昭和58)年
- 27 財団法人 山形県埋蔵文化財センター『大坪遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第23集 1995(平成7)年
- 28 山形県教育委員会『分布調査報告書(17)』山形県埋蔵文化財調査報告書第148集 1990(平成2)年
- 29 山形県教育委員会『地正面遺跡 前田遺跡 塚田遺跡 佐渡遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第51集 1982(昭和57)年
- 30 山形県教育委員会『豊原遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第66集 1983(昭和58)年
- 31 山形県教育委員会『上曽根遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第116集 1987(昭和62)年
- 32 山形県教育委員会『沼田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第78集 1984(昭和59)年
- 33 山形県教育委員会『境興野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第46集 1981(昭和56)年
- 34 八幡町教育委員会『図説 八幡町史』八幡町史編纂委員会 1995(平成7)年
- 35 山形県教育委員会『北田遺跡第2次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第53集 1982(昭和57)年
- 36 山形県教育委員会『新青渡遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第79集 1984(昭和59)年
- 37 山形県教育委員会『大槻新田遺跡 手蔵田3遺跡 横代遺跡 熊野田遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第137集 1989(平成元)年

- 38 山形県教育委員会『熊野田遺跡第3次発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第146集 1989(平成元)年
- 39 山形県教育委員会『手蔵田遺跡発掘調査報告書(2)』山形県埋蔵文化財発掘調査報告書第98集 1986(昭和61)年
- 40 山形県教育委員会『手蔵田5・6・9遺跡 本川遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第138集
1989(平成元)年
- 41 酒田市教育委員会『手蔵田6・7遺跡』1988(昭和63)年
- 42 山形県教育委員会『桜林興野遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第115集 1987(昭和62)年
- 43 財団法人 山形県埋蔵文化財センター『山楯3・4・5遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告
書第4集 1994(平成6)年
- 44 山形県教育委員会『山谷新田遺跡 山海窯跡群発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第170集
1991(平成3)年
- 45 山形県教育委員会『山海窯跡群第2次 山楯7・8遺跡 山楯楯跡』山形県埋蔵文化財調査報告書第172集
1992(平成4)年
- 46 山形県教育委員会『千河原遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第80集 1984(昭和59)年
- 47 財団法人 山形県埋蔵文化財センター『西谷地遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財センター調査報告書第12集
1994(平成6)年
- 48 鶴岡市教育委員会『荒沢窯跡・玉林坊遺跡分布調査報告書』1992(平成4)年
- 49 山形県教育委員会『熊野台遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第31集 1980(昭和55)年
- 50 山形県教育委員会『不動木遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第100集 1986(昭和61)年
- 51 山形県教育委員会『達磨寺遺跡発掘調査報告書』山形県埋蔵文化財調査報告書第104集 1986(昭和61)年
- 52 富山県教育委員会『上野赤坂A遺跡ー県民公園太閤山ランド地内遺跡群発掘調査報告(1)ー』
1982(昭和57)年
- 53 秋田県教育委員会『一般国道7号八竜能代道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱー福田遺跡・石丁遺跡・
蟹子沢遺跡・十二林遺跡』秋田県文化財調査報告書第178集 1989(平成元)年